

# 教員の授業力の育成と学校づくりに関するコンサルテーション

研究代表者氏名 谷口 知美

共同研究者氏名 船越 勝 越野 章史  
二宮 衆一

連携学校名 紀の川市立貴志川中学校

## 1. 研究の趣旨

受験競争のプレッシャーが中学生に困難と生きづらさを押しつけていること、「自分崩し・自分づくり」(アイデンティティの解体と再編)の時期に中学生があたっているといった制度的条件が中学校にはある。それだけでなく、現代の子どもたちの変容、保護者や地域住民の変貌が中学校をめぐる困難をいっそう大きなものにしていく。だからこそ、中学校は、逸脱行動も表面に現象してくる時期に当たり、実践的な困難に直面せざるをえない。

しかし、こういった困難ななかにある中学校に対する制度的なサポート体制は、十分に構築されていない。教員の実践的な指導力の中核をしめる中学校の教員の授業力の形成は、学校づくりのなかでももっとも重要な課題のひとつである。

こうしたことをふまえて、一人ひとりの生徒が生き生きと活躍できる学校づくりを進めていくために、授業の参観およびそれにもとづく研究協議に参加して、授業力の形成を中心とした学校や教員の課題克服に向けた指導助言をしてきた。

## 2. 今年度の活動

貴志川中学校では、毎年多くの教職員の異動があり、教職経験の少ない教員も複数いる。これまでの取り組みをどう継承、発展させ、教員全体の授業および生徒理解の力量をどう高めていこうかが問われている。

10年目となる今年度は、6月の授業研究、11月の授業研究で学校を訪問した。

### ① 6月14日の授業研究

参加教員:船越、越野、(岩野清美)

- ・5限 公開授業(全クラス)
- ・6限 研究授業(1年生美術科、2年生社会科、3年生理科)
- ・研究授業別協議会(学年別協議会)
- ・全体協議会

公開授業・研究授業ともに大学教員がそれぞれ一つの学年に張りついて授業を参観した。学年別協議会もその参観学年のところに参加し、指導・助言を行った。

### ② 11月15日の授業研究

参加教員:越野、二宮、谷口

- ・4限 公開授業(全クラス)
- ・5限 研究授業(1年生英語科・理科、2年生数学科・国語科、3年生家庭科・国語科)
- ・研究授業別協議会
- ・全体協議会

研究授業については、6月と同様、大学教員は一つの授業を参観し、研究授業別協議会で指導・助言を行った。

今年度、貴志川中学校が「紀の川市瞳きらめく学校推進事業」の指定を受けており、他校の教員や指導主事も複数参加することから、全体協議会の持ち方を変更した。具体的には、各研究授業別協議会で話された内容の報告後、指導主事、大学教員(越野、谷口)が指導助言を行い、最後に「貴志川中学校との連携事業開始から10年」をテーマに越野、谷口が話した。

主な内容を列挙する。「当時の木村彰吾校長先生と市川純夫先生(和歌山大学名誉教授)とのつながりで話し合っ始めた連携事業だった」、「生徒たちが荒れている状況があり、そのなかで1人も排除しない授業こそ最高の生徒指導だという認識となり、『すべての生徒が満足する授業こそ最高の生徒指導である』をスローガンに、どうやったら子どもが授業に参加するのかを先生たちが工夫してきた。その成果が表れていると実感した」、「先生方が、授業のなかで生徒とやりとりをするのを楽しんでいる姿が多く授業で見られるようになった」、「研究授業後の学年別協議会で、『私の授業では話さないけど、(研究授業を参観して)〇〇くん、しゃべれるやんかって思った』と、具体的な子どもの名前を出しながら授業を語る貴志川中学校のとりくみは貴重である」、「それを通して、いわゆる『教科の壁』を越える授業研究が行われている。今後も大切にしていきたい」。

### 3. 今後について

貴志川中学校では、学年別協議会を大切に育み、「教科の壁」を越えて、生徒理解、どの子どもも参加する授業づくりを進めてきた。生徒指導と授業づくりを別立てで議論するのではなく、授業のなかの具体的な子どもの姿、事実を出し合うことが肝要であり、それが学校づくりを支える核となると私たちは貴志川中学校から学んできた。

今後も、共同研究をどのように進めるのか、教職員のニーズを聞き取りながら、貴志川中学校の課題とともに明確にしていくことが必要だと考える。

## 「授業づくり」を基盤とした「学校づくり」

### ～ 生徒が中心の授業づくり ～

紀の川市立貴志川中学校

#### はじめに

数年前までは、数名の生徒が授業エスケープ状態にあり、職員室のインターホンが頻繁になり、その対応に職員が追われるといった状態が続いていた。一部の生徒の問題行動によって学習環境が崩れ、いわゆる学校の荒れを経験した。この状況を改善する方策として「すべての生徒が満足する授業こそ、最高の生徒指導である。」というスローガンを掲げ、授業を中心にした改革で、学習環境を安定させるよう全教職員が教育活動に取り組んできた。根気強く取り組むことで、4年前より授業エスケープがほぼなくなった。今では、生徒指導上の大きな問題行動もほとんどない落ち着いた状態の学校となり、生徒は荒れのない中学校生活を送ることができるようになってきている。

#### 本校の取組；「チーム貴志川中学校」(スローガン)

『One for all, All for one.』 ～ひとりのために、みんなのために、動き・関わる～

を教育目標とし、生徒のために動き、生徒としっかりと関わり、『①安全で安心な学校、②温かさとやさしさに満ちあふれた楽しい学校、③学びに一生懸命の学校、④運動の楽しさや喜びに満ちた学校、⑤チームとしての取組を行う学校』を築くことを心掛けている。

生徒へ関わりを大切にする教職員という点から、朝の登校指導・挨拶、学級や自転車置き場での生徒対応を教職員は当たり前のように毎日行っている。また、生徒の完全下校を確実にするために、下校指導も欠かすことはなく1日に2回原則全員で実施している。

このように、授業はもちろんのこと、部活指導や生徒指導等の活動においても教職員は連携し「チーム貴志川中学校」として、常に動き回っている。

本校では、授業研究においても「チーム貴志川中学校」が合言葉となり、年間15名を超える教員が研究授業を行っている。2年前よりプレ研究授業を実施し、「生徒が中心の授業づくり」を行うために、授業づくりの時から教員の意見交流が出来るような体制になっている。また、授業改善に外部からの視点を取り入れるために和歌山大学教育学部との連携も行っている。この連携も今年で10年目を迎え、教員の授業改善も進んできている。

## 本校の授業研究と授業づくり

いわゆる学校の荒れを経験していた時代の生徒は「授業が面白くない・楽しくない」と発言することが多かった。学校の荒れを防ぐために生徒指導に力を入れるが、効果的な指導に悩む場面が多くあった。そのため、「すべての生徒にとって満足する授業こそ、最高の生徒指導である。」というスローガンを合い言葉に、授業改善に取り組み、その後いくつかの改善を教員たちの意見の中から実施してきたことが今日の自主的な授業研究につながっている。

### ○"ワクワク感"や"ドキドキ感"を大切にした授業研究

授業改善に取り組む中で、和歌山大学の先生方の指導の下、「生徒がいかに活動しているか」、「教師がいかに生徒を活動させているか」に焦点をあて「生徒が中心の授業づくり」に取り組んできた。授業スタイルも様々な形を採用し、授業内容では、「ワクワク感"や"ドキドキ感"を抱き、生徒にとって「わかりやすく、楽しくて、役に立つ授業」の構築を目指している。

では、具体的には、どのような授業であるか。

\*教師の話を一方向的に聴くばかりではなく、自分の意見や考えを言える授業

\*教師の話に、生徒自らも加わり、自分の意見や考えを述べることができる授業

\*作業や実習などを伴い、生徒同士のコミュニケーションが深まる授業

など、生徒にとって「楽しい」を見つけ出す場面のある授業である。また、学習において「考え方が役立つ」「何らかの必要性が感じられる」ような場面のある授業である。さらに、楽しい授業であっても学習内容がわからなければ、良い授業とはいえない。生徒にとって「学習内容がわかる」という場面のある授業である。

このような授業を展開するためには、授業を観る中で改善点を指摘し合い、それらの意見を参考にしながら授業案を再考し、再度授業を行うというプロセスが必要であると、当時、複数の教師から意見がでた。そこで、考え出されたのが「プレ研究授業」を計画的に実施するということである。研究授業前にプレ研究授業を実施し、生徒目線にたった様々な教科の参加者から、授業に対するコメントを得ている。授業者は、得られたコメントを参考に授業を改善し、研究授業を実施している。その際、コメントをした教師も採用された自分の意見で、はたして授業がうまくいかまさに緊張の研究授業となり、プレ研究授業を実施することで、研究授業が“チーム貴志川”としての研究授業となっている。

### ○「授業のユニバーサルデザイン化」への再挑戦

各学級には、発達障害のある生徒を含め、授業に対して様々な困難さを感じている生徒が在籍

している。そのため、授業内容のイメージを湧きやすくする工夫（いわゆる授業のユニバーサルデザイン化）を増やししながら、これらの生徒を中心にした授業づくりを目指すことで、すべての生徒が「授業がわかりやすい・楽しい」と実感できるような授業研究を続けていきたい。特に、以前そうであったように、これらの生徒がいかに活動しているか、いかに活動させているかに着目して、授業づくりを行っていきたい。

#### ○ 「目指す授業づくりを推進」

組織として授業づくりに取り組んでいることから、生徒の活動場面についての協議も多くなってきた。いまでは、生徒の活動の変容や教師の支援などについても議論できるようになってきている。今後も組織的な授業研究に励んでいきたい。

### 生徒の状況と課題

平成29年度全国学力学習状況調査の生徒質問紙で「1、2年生のときに受けた授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか」の質問に対して、「当てはまる」と答えた生徒の割合は、昨年度全国平均より20ポイント近く高かった。

平成30年度全国学力学習状況調査の生徒質問紙では「生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」の質問があった。この質問内容は、生徒自身の活動が高まっているかどうかを調査するような内容とも受け取れる。この質問に対して、「当てはまる」と答えた生徒の割合は、全国平均より8.5ポイント高かった。これまで"ワクワク感"や"ドキドキ感"を大切にしていた授業研究を行ってきたことが成果となって表れ、生徒自身の活動の高まりにつながってきている。その一方で、授業で学習したことが、将来、社会に出たときに役立つという意識がやや低い結果となっている。

今後、授業づくりの質を高め、将来につながる学びにさらに力を注がなければならない。